

あそ

6

2022



寄稿

亀田虎童子

金魚売アルプスの水飲んでをり
うたてしや猿にもありし花粉症
家捨てて蝶をあつめる病かな
たましひに白桃ほどの重さ欲し
揚羽蝶吾家覚えてゐるらしや
猛犬も猛母も居らずつづれさせ

六月集

さて

佐藤 竹僊

蹠を水にひっかけ鴨來る

道にあるマスクそのまま十二月

この町にうぐひすは來ず家移るか

そそそと空を滑りて花筏

致死量の月日重ねて花筏

花莫産の勝手口にはビニ袋

はるさめや豫報どほりでつまらなし

母は彌生父は霜月さて彼岸

逝く人と醫師とゑみあふ春の果



四月

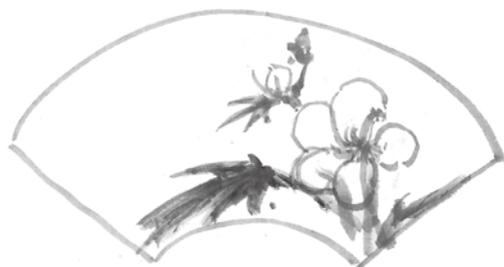
赤座典子

ウクライナの濃き蜂蜜や春が逝く
廃業のクリーニング店燕の巢
コロナにも地震にも遭はず浅蜷汁
齒痒き日々ざくざくと切る春キャベツ
薄氷や普通の暮らし消えるなど
背伸びして黄を競ひ合ふ黄水仙
雪形やへのへのもへじ隻眼に
薄緑薄紅纏ひ山笑ふ

花のふる庭

秋川 泉

地震ありてしみじみときく春の雨
いつくしみ日溜りにある濃き堇
形見よと微笑むひとの黒ケープ
しやんしやんと立ち働きて花杏
離れ難く共にながむる春の月
花のふる主なき庭一面に
天空に花舞ひてなきひとはずこ
晩春のままごと遊びひとりきり



手乗り文鳥

七郎衛門吉保

句会ありそよそよと行く春裕
春筍の穂先を和へて緑添へ
黒インク垂らすが如く雪解の田
仮名文字を書くやに揺れる藤の房
アクリルの仕切りもありて鎮花祭
変り目に天気痛なり暮の春
手乗り鳥二人暮しに新入生
ピツとピー小鳥と吾の麗らけし

いやおひ

篠田純子

離宮に入る霧笛の長し鬱金桜
弾みつけすすむ雲梯若葉風
いやおひや百福を得る藤穂さん
桜葉ふる老木の幹に苔
いてふ若葉源氏ゆかりの包丁屋
女性スナイパー瞳濡れぬる穀雨の夜



エンジン

篠田大佳

牛込や古刹に傾ぐ老桜

休日のネモフィラ畑ぼたを春の雨

エンジンのまだふるへある穀雨かな

浜風に煽られてゐる石鱈玉

団子屋は本日定休風薫る



雑詠

須賀敏子

突然にブルーインパルス春深む

デジタル化戸惑ふばかり花三分

この庭にしばし留まる胡蝶かな

花終はり実の膨らんで花菜晴れ

真夜中の卓に草餅推敲す

バス降りて春林のなか一歩づつ

生きてきて戦見るとは鳥雲に



石竹

長崎桂子

日満ち満ち例年よりもはや桜

老木壮年木若木はや桜

友好の証しなりけり桜花

寒もどる幾多にて指膝いたし

蒲公英の開花の黄色空は青

春先の窓や障子に七色醸す

雲出でて草雫り終へちと安堵

目が合ひし石竹の鉢を買って来

四月号正誤

寒の明やつと蒼の二輪かな

雑詠

森なほ子

雪嶺を遠に湖畔の桜咲く

彦根城鉄砲狭間より桜

春昼や関伽井のぼこり又ぼこり

ハーレーをはらと落花の二三片

売りに出し家に灯ともる春の暮

最新は最後に同じ春の雪

人生の誰も主役や入学す

花に葉の追ひついてくる花水木



大木は揺れもどすなり青嵐 亀田虎童子



紅梅へほぐれんとする辛夷かな 佐藤 竹僊

日陰りてたちまち居間のうそ寒し 森なほ子

隣家より偏屈爺の「鬼は外」 赤座 典子

暖かや好きな कोरो に並び居て 秋川 泉

庭角にぽっかりぷっくり露の臺 七郎衛門吉保

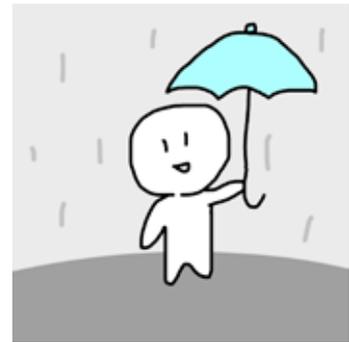
卒園し芽出し忙し孫娘 篠田 純子

泣き黒子須可取焉乎下萌ゆる 篠田 純子

夜の雨を花卉に受けて庭椿 須賀敏子

たんぽぽや定刻過ぎのバスを待つ 田中藤穂

紅椿 七十余年住みし家 田中藤穂



蔦芽吹くホーム入居の日の近し
桜の芽ほのと別れの時迫る
子らの近きホームを選び蔦芽吹く
搔き曇り髪逆しまに春一番
御堂三つ仏九体百千鳥
立春やワクチンを待つ群静か
串カツ屋が選挙事務所の桜時
花の雨小走りに行くヨガレッスン
露国にも咲いて欲しけりヒヤシンス
鞦韆のまだ揺れ残る夜六時
この空の続きに戦春悼む
気象激し黄水仙開花に嬉嬉

長崎 桂子
森 なほ子

赤座 典子

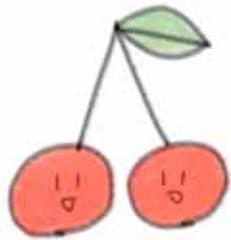
秋川 泉

七郎衛門吉保

篠田 大佳

須賀敏子

長崎 桂子



忘れざる坂の名雪に転がりて

亀田虎童子

瀧春一先生のお住ひが西武線中井駅から線路沿ひに歩き幾つ目かの坂を右に折れて上った途中にあった。私のおぼげな記憶では先生の奥様のお通夜にお伺ひしたのが初めてと思ふ。家の前の焚火で青木啓泰・松下道臣など同世代の人と初めて会ったのでは。虎童子さんの記憶はさすが、「忘れざる」である。確か坂の名は「七^{ナナ}の坂」では。「雪の転がりて」は坂の名よりも忘れざることである。

(私の勘違ひで鑑賞句が前号と入れ子に) (喜孝)

これ以上大きくならず水中花

亀田虎童子

水を張った容器に、水中花をストンと沈める。多くの目に凝視され、花が開く時「オオー」「わあー」と皆が声を上げる。この瞬間が「水中花になって良かった」と無機物ながら思うのである。開いてから2、3日は注目を集めるが、暫く経つと忘れられる。大きくもならず、種もできないし、水も濁ってきた。思わず水中花の儚さに、同化してしまいました。(純子)

思ひ出は思ひ出を生む落椿

亀田虎童子

思い出話がまた思い出になっていく。例えば、老境にいる人が若い人に思い出を話すと、話の座の中で新たな思い出ができます。落椿から生命の破壊と再生を想います。(大佳)

母に向き双手差しだす毛糸の輪

佐藤竹僊

毛糸は総で売るのが主流の時代がありました。毛糸玉にするのに、絡まらない様、作者は総に手を通し、ピンと双手を張る。お母様は、黙々と毛糸玉を太らせる。作者の手のくたびれが、総の緩みとなり、「ピン」と声が飛びます。編み上がったセーターを着ている嬉しそうな作者と、笑顔のお母様が見えてきます。(純子)

白梅のベンガラ紋の凜とあり

佐藤竹僊

ベンガラはインドのガンジス河口の地方で、綿織物が盛んだそうです。ベンガラの上に多く含まれる酸化鉄が染め色を赤くすることから、赤みを帯びた茶色をベンガラ色というそうです。紋のパターンは丸の中に点を描くものが目立ちますが、作者が想定した紋様かは不明です。白梅に「ベンガラ紋」に似た意匠を見つけ、敬服する様子を想像しました。(大佳)

残る雪鈴鹿連峰縞模様

長崎桂子

鈴鹿の山の春めく様子がうかがえます。縞模様も綺麗な模様であると想像します。掲句を声を出して

読んだ時に、流れるようなリズムが心地よいです。(大佳)

鴨去って烏なにやら静かなり

森なほ子

烏の沈黙に、鴨と烏の間に何があったのか読者の考察の余地があります。狩猟本能の落ち着きか、筭碁の悪友か、何か悪いものでも食べたのか。はたまた異種の色恋があったのか。想像が止まりません。(大佳)

若者の羽搏く力春の燭

赤座典子

鑑賞者も、若者の流行に触れて、彼らの行く末を見守るような年代になりました。作者は弱く優しいながらも希望の炎を若者を見出しているようです。(大佳)

涅槃図の獅子は腹出し嘆きをり

秋川 泉

涅槃図の獅子について調べると、仏陀が何も恐れない威勢の象徴であったり、何事にも全力を尽くす力の象徴であるなどと記述されていました。仏教ではあまりこういう言われ方はしないと思いますが、悲しい時に全力で悲しむのも、死者を想うことなのかなと思いました。(大佳)

百箇国競ふマスクも厚手かな

七郎衛門吉保

冬季オリンピックの様子でしょうか。東京の街では、北京オリンピック以後、KN95(中国規格)やKF94(韓国規格)に代表されるダイヤモンドカットのマスクを着ける人が増えて、マスクの色も華やかです。オリンピックが使い捨てマスクの見本市となった印象があります。(大佳)

売店のをぢさん弾む梅日和

篠田純子

「弾む」は、声の様子や気分が良くて動きが弾んでいる様子でしょう。梅日和の浮気な感じと映え合います。ただ、一メートルほど休みなく上下運動をしているおじさんを想像してしまうのは、鑑賞者が物理演算の動画を見たせいでしょうか。(大佳)

木の芽どき物狂ひせる大統領

篠田純子

大統領は今アメリカのバイデン大統領はじめ十指に余るほどをられる。この句の大統領はだれだれと名指しをしてはゐない。読者が如何様に読み取ってもよいやうである。木の芽どきはあるクリニツクのホームページに【春は「木の芽時」の季節です。木の芽が息吹くころ精神的に不安定になることを昔の人は「木の芽時」と表現していました。春の寒暖の差に自律神経が対応できなくなり体調不良をおこすことが原因ではないかといわれています。】と。なんとも痛烈に皮肉な作品。(喜孝)

春水よ色には色があつたのだ

篠田大佳

心情的にモノクロームの世界に、身を置いていた作者なのだろうか。久々に戸外に出てみると、春のきらきらした世界が、広がっていた。街の色、花の色、風の色……。「色には色があつたのだ」という驚きを句にした事が、作者の特異性を表していると、鑑賞しました。(純子)

薄氷やまなこにひかり入るけふぞ

篠田大佳

○近作に当然と思へることを再確認するやうな作品を散見する。何かを見透さうとする気配がある。掲句、一瞬の心の襞に覚えた感触を捉えてゐる。決意のやうなものが見える作品。(喜孝)

新しき靴フィットしていぬふぐり

須賀敏子

おろしたての靴がフィットするのはとても嬉しいです。散策が楽しくなること請け合いです。天気の良い一日であつたと想像されます。(大佳)

老人に日昏れは淋し小雪降る

田中藤穂

作者の胸に去来する過去、現在、未来が、鬱々とした空と重なり合い、何とも言えない淋しさに襲われていてと想像します。淋しさに寄り添う小雪のやさしさは救いです。(大佳)



佐藤喜孝

文鳥と演歌聴いてる昭和の日
良きことも少しはありし四月かな

赤座典子

○けふはカレンダーが赤丸だが昭和の日といはれてはて?と思ふ。私の年代から上の人には昭和天皇誕生日といった方が納得する。文鳥と演歌を聴くゆとりの世代である。私は日のあるうちはクラシックを流す。ところが晩酌を始めるとクラシックより気がつけば演歌にチャンネルを合はせてゐる。

○この四月は作者にとりよくないことが多かった月のやうだ。それでも少しは良いことがあつたと自らを慰めてをられる。

夜の三毛花ふわふわと降りかかる
枯れ枝か野鳥の遊びいそがしく

○夜遊びをしてゐるのは野良猫か、もしかしたら飼猫かもしれない。夜、花がふわふわと降る中にゐる三毛猫。絵画のやうな光景。黒猫だとまた違ふ絵画になる。「ふわふわ」は文語では「ふはふは」と表記するが、擬態語なので「ふわふわ」でも一概に間違へとは云へないと思つた。

○野鳥が遊びにいそがしい。巣作りでは遊びではないのでどのやうな野鳥の行動が遊びと見えたのだらう。上五の「枯れ枝か」の[・]か[・]が分かりにくい。鳥が遊んでゐる物が遠目で枯れ枝と断じえなかつたのか。さう読んだが確信は持てなかつた。

七郎衛門吉保

東 欧 路 初 音 を 待 て ん 逃 避 行
ウ ク ラ イ ナ 共 感 疲 労 の 春 愁

○掲句は二句並べると状況がわかるが、この句のみだと意図が伝はりにくい。直截に「ウクライナ

初音を待てぬ逃避行」では。私には初音が効いてきて佳句だと思ふのだが。

○吉保さんは今眼前に起きてゐることに反応する。そして自己の意思を一句に詠むといふ俳句では大変難しい作句法をされてゐる。この句、意図はかうではないかと思ふことはあるのだが……。「ウクライナ共感」には助詞を使つてはどうか。そして「疲労の春愁」の疲労はだれが疲労してゐるかが不明。吉保さんが心痛で疲労してゐるとすると、戦争に対して春愁は違ふやうにおもふ。

篠田 大佳

既 視 感 の 桜 並 木 を 浮 遊 す る
少 年 の 枕 の 夏 が 泣 い て ゐ る

○【既視感とは、実際は一度も体験したことがないのに、すでにどこかで体験したことのように感じる現象である。】と。実際には体験したことがないと思ひ込んでゐても脳の裏に知らぬ間に仕舞はれてゐることもあるのでは。作者はこのやうな世界をどんな心境で浮遊してゐるのであらうか。

○「算術の少年しのび泣けり夏 西東三鬼」とこの句以降なぜか「夏」と「泣」が組み合はされた俳句が目につく。生気溢るる夏、その夏ゆゑに少年は泣く。さう云へば長い休暇の夏は少年少女にとつていや厭が応でも自己と向き合ふ季であつたやうだ。人知れず泣くには古来より枕が入用。

須賀敏子

桜蕊踏んで五千歩誕生日
桜草十八歳は成人に

○私も五千歩と迄いかないが歩くことに努めてゐる。私は公園をその時の体調で何周かする。桜の木の下は五月も末になると、地に落ちた桜の実もいつか消え涼しい木陰を作つてゐることだらう。○こんなに早く成人扱ひにされ今の若い人は責任がかむさり大変なこと。江戸時代の人から見ればまだまだ甘いと云はれるかも。この句の成人された若人はきつと女性の方であらう。祝福の気持ちの表れた作品。

長崎桂子

永き日や入り日まで畑を打つ人
産物を育てる鈴鹿風かな

○五七五の調子を外すことにより生きる句もあるが、この句の内容は破調に不向き。正調が相應しい内容と思ふ。「入り日まで畑を打つ人日の永し」。

○産物はその土地が産するものだが、この句は農産物であらうか。鈴鹿風を研究してゐるページがあつたが、科学的で味気ないものであつた。二月一日の「四日市市ミニニュース」に【四日市は、「鈴鹿おろし」という西から吹く冷たい風があります。これは、御在所岳など、鈴鹿山脈から吹いてくるような風の事を指します。でも実は、その風は、「伊吹おろし」の一種だったりします。】鈴鹿風も伊吹風も歳時記には未収だが桂子さんは疑ひ様もなく冬の季語として読まれてゐる。風も寒いだけではない。この寒さが農産物を育てると詠まれた。寒い鈴鹿風に愛情のやうなものも見える。桂子さんは四日市を心から愛してゐる。

森なほ子

花の種蒔いて立ち去る人の庭
体温もプライバシーと亀鳴きぬ

○勝手に他人の庭に花の種を蒔いてゆく人。本当にそんな人が世の中にあるのだらうか、それとも詩の世界の中の人なのだらうか。一見幸せをまき散らす善行のやうにも見えるが、迷惑だとおもふ人も確実にゐる。独りよがりな人がゐるものだ。なほ子さんはどう思はれたのか。s

○「体温 プライバシー」でネットで調べると確かに話題になつてゐた。作者もいささか首をかしげてゐる感がある。季語はこの話題を斜に見る趣きがある。

山羊

坐ること知らぬ小山羊や草の花
芝 尚子
つながらし山羊と目が合ふ梅の花
早崎 泰江
老いし山羊見上げる空に桃の花
早崎 泰江
紙食べて手品師となる春の山羊
田中 藤穂
蝶低し山羊が子を呼ぶ耳ふるふ
渡邊 友七
糶田に山羊はればれと糞落す
早崎 泰江
風花や山羊の背中に紛れこむ
早崎 泰江
秋霖や小屋の奥より山羊の声
早崎 泰江
この杭の山羊を結はへし明易く
定梶 じょう
母山羊と子ヤギ呼び合ふ夕桜
早崎 泰江
山羊親子げんげ畑を我が物に
早崎 泰江
春風に山羊顎ひげを靡かせる
須賀 敏子
山羊のゐる駅で花見の終はりけり
須賀 敏子
草抜いてついと出す手に山羊の食み
七郎衛 吉保
さびた咲き鉄道官舎山羊を飼ふ
田中 藤穂
子山羊のあたり殊に多くのあかとんぼ
佐藤 喜孝
焼石 須賀 敏子
焼石岳に雪形のありヒナザクラ
須賀 敏子
焼肉 早崎 泰江
川べりに夜桜眺む焼肉屋
早崎 泰江
川風が涼しさはこぶ焼肉屋
早崎 泰江
野球

分校の野球の子らの春の汗
芝 尚子
炎帝に野球少年整列す
鈴木多枝子
野球スト子規にも告げむ曼珠沙華
堀内 一郎
三月や野球部員の兎跳
竹内 弘子
春分や野球に涙時忘る
森山のりこ
青嵐野球スタンドウエーブす
長崎 桂子
十六夜や空席青き野球場
佐藤 喜孝
枯芝生サツカーの子と野球の子
須賀 敏子
朝東風に野球部員のランニング
鈴木多枝子
冬至空野球少年さんざめく
赤座 典子
校庭の野球に倦みし杉落葉
佐藤 喜孝
今朝の秋外野へ飛ばす草野球
長崎 桂子
少年野球のコーチの叱咤冬薔薇
篠田 純子
天高く野球少年大鞆
山荘 慶子
野球部の子の洗濯や母の夏
田中 藤穂
秋高し混成チームの草野球
田中 藤穂
草野球ボール追ひつつ彼岸人
秋川 泉
秋の甲子園高校野球交流試合
長崎 桂子
夜勤
ヒール高きブーツの人は夜勤明け
赤座 典子
厄 佐藤 喜孝
厄除も七五三も大師寺
秋川 泉
修正会の大般若経苦厄消す

風青し獅子頭厄払ひ臨時祭
災厄を数多乗り越え生身魂

役

謝辞述べる役終へし父春隣
赤座 典子
木槿垣子役気合の旅芝居
山荘 慶子
聞き役に回り夜長の話の座
栢森 定男
月下美人ほしいまなる主役の舞
松村美智子
次ぎ次ぎと達者な子役松の花
赤座 典子
どくだみを摘みあれこれと役立つる
長崎 桂子
ままごとの母役決り鳳仙花
森山のりこ
役に立つ幸せもあり日向ぼこ
赤座 典子
蒲団敷く役は夫に譲りけり
須賀 敏子
開かれし桜まつりの主役待ち
早崎 泰江
脇役はさびしきものよ鉦叩
木村茂登子
身を粉にしても脇役唐辛子
渡邊 友七
聞き役の戸惑ふばかり夜の菊
鎌倉喜久恵
根深汁つましき膳に主役張る
赤座 典子
小さき餅脇役めける雑煮かな
森 理和
狼はいつも悪役黄砂降る
森山のりこ
秋霖や聞き役となる車椅子
森山のりこ
薬師寺の牡丹の便り聞き役に
長崎 桂子
花吹雪舞台に主役多すぎる
森 理和
春の雪今日の主役の我微熱

長崎 桂子
赤座 典子
赤座 典子
山荘 慶子
栢森 定男
松村美智子
赤座 典子
長崎 桂子
森山のりこ
赤座 典子
須賀 敏子
早崎 泰江
木村茂登子
渡邊 友七
鎌倉喜久恵
赤座 典子
森 理和
森山のりこ
森山のりこ
長崎 桂子
森 理和

磯遊び荷物を見張る役回り
さうめんを自分は食はず流し役
長崎 桂子
菊人形地味な脇役花色で
木村茂登子
若葉道行けば主役を得たやうな
大日向幸江
世のために役立たぬ身や夏怒涛
長崎 桂子
悪役は祖父が一手に山かがし
阿部 寒林
祖母という役有難し寒玉子
田中 藤穂
片陰を選び選びて役こなす
赤座 典子
二才児の脇役であり櫂の実
長崎 桂子
えんぶりや父は入り婿馬の役
中川句寿夫
稲架の棒役終え風とじゃんけんば
七郎衛 吉保
葉大根主役私と緑の葉
七郎衛 吉保
花は散り散らぬ菜の花主役かな
七郎衛 吉保
役終てアトに転身する案山子
七郎衛 吉保
上の子は叱られ役よ水鉄砲
森 なほ子
二〇二二年二月二十二日は猫主役
須賀 敏子
夜具
底冷の吉野の夜具のやはらかし
田中 藤穂
夜具干して名残をしまし避暑地かな
大日向幸江
緑さす薬師如来は堂のなか
早崎 泰江
薬師様辛夷の白が眩しくて
芝宮須磨子
どくだみを軒に吊して薬師なる
鎌倉喜久恵

長崎 桂子
木村茂登子
大日向幸江
長崎 桂子
阿部 寒林
田中 藤穂
赤座 典子
長崎 桂子
赤座 典子
中川句寿夫
七郎衛 吉保
七郎衛 吉保
七郎衛 吉保
森 なほ子
須賀 敏子
田中 藤穂
大日向幸江
早崎 泰江
芝宮須磨子
鎌倉喜久恵

ただ見舞ふ薬師寺の塔夕映えし
 薬師寺の山門よぎる秋の昼
 薬師講いちにち白い夏椿
 女正月薬師参りの二人づれ
 薬師寺の牡丹の便り聞き役に
 母の目の片方不自由初薬師
 春の土耳傾ける薬師の目
 春の鬱祓ふ薬師の目の強き
 母縫ひし浴衣を孫にお薬師さん
 籠国や小春日和の薬師堂
 老い止めの薬のありや初薬師

屋久杉

屋久杉の箸かるやかや新豆腐
 屋久杉の一枚天井涼しさよ

役者

葉桜やいまも役者の息づかひ
 魂祭歌舞伎役者の手の白さ
 薬喰歌舞伎役者の母娘
 役者絵の朝顔選ぶ豆しぼり
 春ささす八百屋の旦那役者顔
 山藤や駅の足湯に役者見ゆ
 夏落葉役者は口を閉ざしけり

役所

早崎 泰江
 早崎 泰江
 遠藤 実
 芝宮須磨子
 森山のりこ
 篠田 純子
 篠田 純子
 篠田 純子
 森 理和
 井上 石動
 亀田虎童子
 田中 藤穂
 東 亜 未
 江倉 京子
 須賀 敏子
 森 理和
 森山のりこ
 篠田 純子
 田中 藤穂
 篠田 大佳

役所務めの鯉張つて五月病
 區役所の窓口にある秋の晝
 市役所に柿たわわなり十二月
 区役所の福祉課の窓竹の春
薬膳
 病む友の薬膳とせむ蓬摘む
 夏料理薬膳として白ワイン
薬草
 木洩日を受けて拡がる一葉草
約束
 子規旧居訪ふ約束の夏過ぐる
 約束の水際に立つ恋螢
 約束の下駄買ふ日和一葉忌
 秋霖や付箋の約束滲み出す
 山査子の垣の傍ら約束す
 約束の百合の種持ち同窓会
 約束の如八月十五日晴
 カラオケの約束落葉おとたてて
 約束やつぎつぎ葉櫻燕の子
 約束の様に我家の彼岸花
薬味
 泥鰌煮ゆ箱一杯の薬味葱
 どぜう鍋葱のあふるる薬味箱

篠田 純子
 佐藤 喜孝
 赤座 典子
 田中 藤穂
 芝宮須磨子
 芝宮須磨子
 須賀 敏子
 田中 藤穂
 関口 ゆき
 後藤 志づ
 篠田 純子
 鎌倉喜久恵
 鈴木多枝子
 早崎 泰江
 佐藤 恭子
 佐藤 喜孝
 須賀 敏子
 森山のりこ
 赤座 典子

どぜう鍋薬味の葱は木の升に
 新蕎麦や薬味不要と戴ける

櫓

櫓拍子に青藍ふかめ夏の灘
 豆まきの櫓組み終へ鳶の者
 冬紅葉火の見櫓はつきぬけり
 松の花大砲残骸櫓址
 十五夜の火の見櫓となりにけり
 魂まつる櫓太鼓の囀れ声
 櫓の軋みゆらりゆらりの花あやめ
 櫓の灯ぶつかり飛べる秋の蟬
 三重櫓木質構造風光る

焼跡

三月や焼跡の修羅父と行き
 焼跡の土間のさびしら春の雪

夜景

甲州ワイン夜景にかざし夏館
 ピンボケの夜景さくらはくつきりと

夜警

木枯や過ぐる夜警に夫のをり

焼岳

焼岳の上の上雲の峰
 焼岳の又隠れたり夏雲

田中 藤穂
 長崎 桂子
 関口 ゆき
 芝宮須磨子
 山莊 慶子
 長崎 桂子
 定梶 じょう
 赤座 典子
 森 理和
 篠田 純子
 赤座 典子
 芝宮須磨子
 定梶 じょう
 赤座 典子
 篠田 大佳
 森 理和
 須賀 敏子
 須賀 敏子

焼岳の山の色あり大正池
野犬
 狼に似し野犬行く埋立地
夜行
 春暑し百鬼夜行と列車事故
 夜行バス七曲りして星近く
 青嵐一路京都へ夜行バス
 おむすびの新海苔の香も夜行バス
 大カーブ雪落し行く夜行バス
 雪しまく夜行列車の立往生
夜光
 夜光虫詩となることばわき出でよ
 夜光杯月のまどかを酌み隠し
 夜光杯月のまどかを酌む初秋
 分合へる刺身は旬の夜光貝
野菜
 朝市に野菜をえらぶ朝寒し
 離乳食鍋にはりつく春野菜
 耕転機に積まれ客待つ夏野菜
 鍋にをどるビタミン色の夏野菜
 絵手紙に野菜いろいろ豊の秋
 胡瓜苗茄子苗も積む野菜売
 無農薬野菜の箱の霜便り

七郎衛門吉保
 篠田 純子
 赤座 典子
 須賀 敏子
 森 理和
 赤座 典子
 篠田 純子
 篠田 大佳
 定梶 じょう
 佐藤 恭子
 佐藤 恭子
 赤座 典子
 長崎 桂子
 東 亜 未
 赤座 典子
 竹内 弘子
 芝 尚子
 鎌倉喜久恵
 東 亜 未

五月中旬 木が鬱蒼とした公園がある。公園といふよりただの森である。立札によると持主は地元の人ではない。今は植物図鑑を持参しなくとも草の名はすぐ分かる便利な時代に住んでゐる。スマホでgoogleを立ち上げカメラマークを押し眼前の花を撮る。と、これではないですかと似た写真が表示される。花の名を知らないより知ってゐる方が詩興が湧く。分かった名前には「夕化粧」。糸のやうな細い茎に一花揺れてゐる。群れてゐる様で群れてゐない風情ある花。詠みたいのだが広辞苑ではオシロイバナの異称とあり使ひにくい。のでアカバナユウゲショウともいふらしい。後日下草刈りで見事に消えてしまった。

五月下旬 藤穂さんからいただいた笹竹の鉢から笋が生えた。黒色の幹で珍しい笹竹。下石神井に引越してきた時二本生えていたがすぐ一本が枯れてしまった。慌てて大きな鉢に植替えて様子を見ていたところ

知らぬ間に笋が出てゐた。笋は光速で親竹と背丈が並んだ。藤穂さんのお庭とお家に別れのつもりで会ひに行った。借家は三方道に囲まれてゐる。残りの一边が

南側に狭庭の向こうに二階家が建つてゐる。そこで茗荷を植ゑてみたいと思つて藤穂さんに相談したら庭にいくらでもあるわよと。あつかましく袋を持参した。

藤穂さんも庭に降りて探したが茗荷にはまだ早かったのかどこにも見当たらないといふ。確かこの辺よとシャベルで掘ると茶色の根が出てきた。藤穂さんも根はみたこともなく茗荷かどうかは確信が持てないがといはれたが数本いただいた。庭の隅に植ゑてみたがひと月経つても地面に何の変化もないので諦めていた。ところが私の目を盗んで三、四本笋のやうなものが出てゐる。調べたら茗荷竹といふらしい。今の歳時記では「春」だが、「俳諧歳時記菜草」では夏。「茗荷笋」に「みようがのこ」とふりがながあつた。「其性、陰を好む」ともあるからここにピツタリではと花を樂しみにしてゐる。

藤穂さんのお庭のほんの一部がここには在る。

六月上旬 六月号は藤穂さんを偲ぶ号の予定であつたが編集部の都合でひと月送らせていただきたい。よろしく。田中藤穂さんに続き大日向幸江さんが急逝された。呆然としてゐる。

「あをキワード辞典」を編んでゐて「夜具」の項に驚いた。藤穂さんと幸江さん一人の句が並んでゐる。因縁めいたものを覚えたが夜中にこの文を書いてゐるからかもしれない。この欄を編んでゐてこの人がこのやうな句を作られてゐたのかと立ち止まることしばしば。「役」に

役に立つ幸せもあり日向ぼこ 典子

世のために役立たぬ身や夏怒涛 寒林

役に立たなければといふお二人の思ひの表し方。

磯遊び荷物を見張る役回り 桂子

昨夏伊豆の浜での簡易テントの中で同じ様な体験をした。このやうなことでも親近感が増すものだ。

今月は早崎泰江さんの句が多く出てきた。

稽田に山羊はればれと糞落す泰江

に梅雨空を跳ね除ける爽快感を味はつた。泰江さんの山羊と同化してゐる容子が微笑ましい。川のそばの焼肉屋にも惹かれた。昔日、神田川吟行の折焼肉屋で句会をしたことが蘇る。

山査子の垣の傍ら約束す 喜久恵

「傍ら」がリアル感があつてよい。子供のころの回想が、いや青春の想ひ出ではと。こんな勘繰りを喜久恵さんなら許していただけさう。山査子は北原白秋の詩に出て来さうと調べたら「この道」に。この句にはこの詩を思はせる雰囲気がある。

屋久杉の箸かるやかや新豆腐藤穂

もう一句似た句を作られてゐた。

屋久杉の箸のかるさよ鳥雑炊 藤穂

きつとお気に入りの箸だったのだらう。



あとがき

六月半ばになりいよいよ梅雨に入った。開き直って雨を楽しむ季節と決めたが、時に元気が過ぎて被害をもちたらず。今年は被害が出ないように願っている。

大日向幸江様

渡辺京子さんからお電話で幸江さんが五月二十一日で逝去されたことお知らせをいただいた。この手のお知らせにはいつも思考が硬直してしまひ、なんといいよいかかわからなくなってしまう。投句がしばらく途切れてゐたので案じてゐたのだが、いつものやうに復活されると希望を持ってゐたのだが。合掌。

短文「馬」のお願い

気まぐれに五月のダービーに生まれて初めてネットで馬券を買ってみた。ネットで見ても競馬場の観客の興奮が伝はる。コロナを抜けつつある気配を覚えた。

競走馬のむきむきの筋肉にびっくりした。西部劇に出てくる馬と全く様子が違ふ。走るためだけに鍛えた事がよく分かった。尻尾は水平に靡いてゐる。鬣は風にもまれてぐちゃぐちゃだ。ダービーといふものを堪能した。

馬券の結果はないしょ。(喜孝)

二〇二二年六月号

発行日 六月十五日
発行所 〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三
サンハイツ石神井2 一階
電話 090 9828 4244

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット/須賀忠男・福井美佐子・テイリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共) / 一年

ゆうちょ銀行(普) (店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)